



あお きゅう せい しゅ
青いたてがみの救世主

ノプロプス
noprops / 原作

くろ だ けん じ
黒田研二 / 著

すず ら ぎ
鈴羅木かりん / イラスト

卓郎

東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。

ひろし

北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぞ解きが得意。

たけし

南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイイヤツ。

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているという事実を知ったひろしの提案で、モールス信号を応用し、言葉を伝えられるようになった。

美香

東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。



怪物



ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかかってくる。ひろしたちはこの夏、「ジェイルハウス」などあらゆる場所での怪物に遭遇したが、犬が苦手であることや、頭が重く泳ぐことができないなどの弱点を突くかたちで、なんとか魔の手を逃れてきた。宇宙から飛来した物質・ブルースターの中に入っていた虫「パラサイトバグ」が体内に入ることが原因で、人間が怪物に変異する可能性があることがわかってきた。

メサイア

「この世界をブルーデーモンでうめつくすこと」を目的に、ブルースターおよびパラサイトバグを部下に集めさせている。サーカスの「リリー」と「ジョー」もメサイアの部下だったことが判明している。



ナオ

北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは伯父・姪の関係。ブルーデーモンにさらわれてしまい、消息がわかっていない。



ハルナ先生 せんせい

ひろし達が通う北部小学校の教師。生徒たちが多数失踪し、閉鎖されることになった碧奥小学校の元・生徒でもある。クロさんの悪事を知り、ひろしたちに協力してくれる。行き場を失っていた親友のユズキを迎え入れ、家で一緒に暮らしている。



クロさん

メサイアの元で「カマロ」という名前 で仕え、ブルースターを集めていた。ジェイルハウスでのひろしとの会話がきっかけで、メサイアに協力することをやめ、今は独自に行動しているようだ。



ユズキ

ハルナ先生の同級生として碧奥小学校に通っていたが、パラサイトバグを誤って口にしてしまい、ブルーデーモンになった。現在は力をコントロールできるようになり、人間だった頃の姿にも変身できる。



イズミさん

いまは美香の家で飼われているシーズー犬・マロンを販売していたペットショップの店員。自称・情報通で、いろいろなうわさを知っているようだが、あやしい行動が多いためタケルは警戒している。



ワタル&コウジ



廃校となった碧奥小学校の音楽室で暮らしている幽霊の兄弟。兄のワタルはもとはハルナ先生の同級生だったが、二十年前に起きた事件に巻きこまれ、兄弟そろって行方不明になっていた。

七瀬未来



ひろしとナオのクラスに転校生としてやってきた病弱な少女。クラスメイトとして同じ教室で過ごすことができたのは一週間ほどで、体調悪化を理由に別の街へと引っ越していつにしまった。短い期間ではあるが、同じ本を読んでいたことをきっかけにひろしと交流を深め、ふたりだけの思い出をつくった。

目次

11	地下室のブルーデーモン ちかしつ	109
10	キャンプ場にて じよう	100
9	消えたお姉さん きねえ	090
8	未来が見える女の子 みらいみおんなこ	077
7	七瀬さんのおみまい ななせ	062
6	ケンタさんとの再会 さいかい	051
5	迷子の子イヌ まいこ	042
4	大晦日の朝 おおみそかあさ	033
3	宙にうかぶライオン ちゆう	024
2	門松のてっぺんに かどまつ	015
1	おくれてやってきたひろし君 くくん	008

12	音楽室での再会 おんがくしつさいかい	119
13	今夜、なにかが…… こんや	129
14	二十年前の出来事 にじゅうねんまえできごと	138
15	青鬼のたくらみ あおおに	148
16	脱出 だつしゅつ	158
17	ぼくの覚悟 かくご	167
18	みんなを救い出せ すくいだせ	176
19	テントウムシを追いかけて お	187
20	さびれた倉庫で そうこ	199
21	青いたてがみの救世主 あおきゆうせいしゅ	210
	ひろしによるなぞの解説 かいせつ	222

あらすじ

ぼうはん
防犯カメラにブルーデーモンにさらわれる映像が残され
ていたナオちゃん。ぼくたちはあれから毎日、商店街で
ききこみをしているんだけど、ナオちゃんは見つかって
いない。それにクリスマスイブに大きな事件が起きて以
来、街全体がピリピリしていて嫌な感じだ。ブルーデー
モン化（青鬼化）したひとたちと、そうではないひとた
ちが対立しているみたい。この街に「救世主」が現れる
としたら、どちらの味方なんだろう……？

1 おくれてやってきたひろし君

年の暮れもおしせまった十二月三十日。

テレビのニュース番組は今日もブルーデーモンの起こした事件についてあれこれ伝えている。コンビで突然巨大化し商品だなをたおしてしまった若者。街なかでうっかり道路標識をへし折ったサラリーマン。毎日、似たような出来事ばかり起きているので、もはやおどろくことはほとんどなかった。アナウンサーもすました顔で、淡々と原稿を読み続けるばかりだ。

全国各地でブルーデーモンたちによるデモ活動も行われているらしい。テレビ画面には「人権侵害」「青鬼を差別するな」と書かれたプラカードを持つ人たちの姿が映し出された。

ぼくは複雑な思いで、その映像を見つめる。

クリスマスイブに碧奥町の商店街で起こった騒動以降、ブルーデーモンたちはますます周囲から敬遠されるようになった。店を破壊したり、クリスマスツリーをたおしたり、あれだけ大暴れしてみんなに迷惑をかけたのだからそれも仕方のないことだろう。

ブルーデーモンたちは怒りをおさえきれなかったり、極度のパニック状態になると、自分自身

をコントロールできなくなつて暴れ出すことがたびたびある。もちろん、すべてのブルーデーモンがそうなるわけではないのだろうが、クリスマスイブの事件のインパクトがあまりにも強烈だったため、世間的にそのようなイメージが定着してしまったようだ。

あのとき、ブルーデーモンがパニックにおちいつたきつかけのひとつはぼくだつたから、多少は責任を感じていたりもする。

ともかくにもブルーデーモンは危険な存在であると認知されるようになり、彼らの排除を求める運動があちらこちらで起き始めた。

ひそひそとうわさ話をされるくらいならまだましなほうだ。会社を辞めさせられたり、家を追い出されたり、イブの騒動から数日しか経っていないのに、ブルーデーモンとそれ以外の人たちの争いはおどろくべきスピードで全国に広がっていった。

ブルーデーモンに自宅をこわされてしまった老夫婦が、『私たち、明日からどうすればいいんでしょう？』とテレビカメラに向かって悲痛な声をあげている。おばあちゃんには頭に包帯を巻いていた。たぶん、家がこわされたときにケガをしたのだろう。見るからに痛々しい。それ以上、テレビを見ているのが苦しくなり、ぼくはリモコンのスイッチを前あしの肉球でおした。

部屋の中がしんと静まり返る。聞こえてくるのは壁時計の秒針が刻むカチカチという音だけ

だ。お父さんは朝から仕事に出かけていて、ぼくはひとりで留守番中。十時にひろし君がやってくる予定だったが、約束の時間を三十分以上過ぎていてというのに、いまだ現れる気配はない。ぼくはふかふかのソファから飛び降りると、大きくのびをして窓の外を見た。目の前を一枚の枯葉がひらひらと横切っていく。空は灰色で、今にも雨が降つてきそうだ。いや、テレビの天気予報では雪になるかもしれないといっていたつけ。この冬一番の寒波がやってくるから外出の気は暖かい格好をしてください、と氣象予報士の人が話していたけど、ほかほかの毛皮を常に身につけているぼくには関係ないアドバイスだ。

……ナオちゃんは どうしているんだろう？

針でつきさされたみたいに、胸のあたりがちくりと痛む。

ブルーデーモンに連れ去られたナオちゃんは、一週間が経過した今もまだ見つからない。

ナオちゃんをさらった犯人——雑誌記者の郡山さんは「食っちゃまったよ」とうすら笑いをうかべながら口にしたが、彼の発言などだれも信じていなかった。ブルーデーモンが人を食べるというのはデマだ。これまで、ぼくたちは幾度となくブルーデーモンに遭遇してきたが、人を食べるところを見たことは一度もなかった。

《まほろば遊園地》で出会ったふたごの料理人に食べられそうになったこともあったけど、あれ

はぼくたちを怖がらせるために演技をしただけなのだと、あとになつてクロさんが教えてくれた。遊園地の従業員が食べられたというのも、すべてでまかせだったそうだ。

ブルーデーモンは人間を食べたりしない。だとしたら、ナオちゃんはきつと生きているはずだ。郡山さんに監禁されているのだろうか？ ……いや、あんなヤツを「さん」づけで呼ぶ必要なんてない。郡山がナオちゃんをさらつた理由はわからないけど、もし今もまだどこかに閉じこめられているというのなら、そしてもしそこが暖房器具すらない場所なのだとしたら、一刻も早く助け出さなくちゃいけない。

玄関の呼び鈴が鳴り、続いてドアのロックをはずす音が聞こえた。カギを持つているのはお父さんとひろし君だけだ。ドアノブを回す音で、やつてきたのがひろし君だとわかつた。

せっかちなお父さんとちがつて、ひろし君の奏でる音はとてもおだやかでやさしい。一度、その話をひろし君にしたことがあつたが、なんでも知つているはずのひろし君が、そのときはよくわからないといった表情をうかべた。どうやら、人間はぼくのように音を細かく聞き分けることができるらしい。ひろし君にできないことがぼくにはかたんにできてしまう——そう思うと、ちよつとほこらしげな気分にはひたることができた。まあ、この才能がなにかの役に立つかといわれると、さっぱりわからないんだけど。

玄関のドアが開く。冷たい空気といっしよに、ひろし君が入ってきた。こんなにも寒いというのに、ひたいにあせがにじんでいる。

「タケル君。おくれてしまつてごめんなさい」

ひろし君は息をはずませながらいった。どうやら、ここまで全速力で走つてきたようだ。

なにかあつたの？

玄関で出むかえたぼくは、ひろし君を見上げながら首をかしげた。

ひろし君の遅刻はよくあることだ。とちゆうでめずらしい虫を見かけ、観察しているうちに時間が過ぎてしまった——なんていいわけを聞いたのは一度や二度じゃない。だけど、今日はそういうわけではなさそうだった。ひろし君のあわてぶりを見れば、それくらいのはわかる。

「碧奥商店街でみんなが待っています。くわしいことは商店街へ向かいながら話しますので」

ひろし君は早口でそう答えると、玄関わきに置いてあつたお散歩用のバッグを素早くかたにかけ、僕をひよいかかえあげた。そのまま家を出る。ドアの施錠をしつこいくらい確認してから、ひろし君は急ぎ足で歩き始めた。

卓郎君、美香ちゃん、たけし君——いつものメンバーとは十時半に碧奥商店街の中央広場で待ち合わせる約束をしていた。家を出るとき、くつ箱の上の置時計は十時四十五分を示していたか

らすでに十五分の遅刻だ。

クリスマススイブの事件以降、ぼくたちは毎日、碧奥商店街に集まって行方不明となつたナオちやんに関する情報を集めていた。今のところ、まだ有力な手がかりはなにも見つかつていない。警察も事件として捜索を進めてくれているようだが、ナオちやんだけでなく、ナオちやんを連れ去つた犯人——郡山の行方もまったくわからないままだつた。

北風がようしやなくぼくたちのからだにふきつける。ひろし君は首に巻いていたマフラーを鼻のあたりまで引つ張り上げた。ぼくは分厚い毛皮のコートを身に着けているからちつとも寒くなかつたけど、ひろし君の手はとても冷たい。少しはマシになるかなと思つて、ぼくはその手に温かな息をはきかけた。けむりみたいに真つ白な息はひろし君の手の甲で広がつて、そのまま宙にのぼつていく。

「タケル君」

人通りがとどえる瞬間をねらつていたのか、それまでだまりこんでいたひろし君がぼくの名を呼んだ。

「これは僕たちだけが知っている秘密の話です。よけいな心配をかけたくないのでみんなにはだまつていてくださいね」

ささやくような声でぼくに語りかけてくる。ぼくを特別な存在だと思ってくれているのはうれしいけど、そんなことをいわれたらなんだか緊張してしまう。

ひろし君は歩くスピードをゆるめぬまま、さらに声のトーンを落とした。

「実は先ほどまで警察の取り調べを受けていました。遅刻したのはそのためです」

……え？

予想外のひとことにぼくはあんぐりと大口を開けずにはいられなかった。

